

## ホーリネス信仰に立つ

日本基督教団仙台青葉荘教会 島 隆 三

この度この小さき者が東海聖会にお招きを頂き、畏れを感じております。私は幼少より「ホーリネスの群」(以下、ホ群)に属する教会で育ちました。ホ群は大戦後、日本基督教団に復帰した旧第6部の教会の教職、信徒がホーリネス信仰に立つて進むべく同志的グループを結成して今日に至ったものであります。その間、教団に留まることを潔しとしない教職・信徒が離脱して新しい教団を結成して参りました。数から言えば、離脱して成長した教派、教団の方がはるかに多数となっております。日本基督教団はご承知のとおり合同教会でありますから、ホーリネス信仰という明確な特色と主張を持つ教会が、合同教会の一員として進むことは困難であることは早くから分かっていたことでありましょう。しかし、我らの先輩たちは、その困難を承知であえて教団に留まるという道を選んで参りました。1970年頃に勃発した教団紛争は、ホ群も大きく巻き込んで、ついに長く同志として歩んできた方々と分離するに至るという痛みも経験しました。

これらのことを振り返って思いますことは、ウェスレーが英国国教会の司祭としてメソジスト運動を強力に進め、彼の主張が国教会の枠を越えていると思われる中で、なお国教会に留まって運動を進めましたが、この矛盾といえ矛盾と言えることを、我らの群も抱えて今日まで来たということでもあります。ウェスレーは、国教会の制度を重視しつつも、主の宣教命令こそ何にも優って優先するべきものと受け止め、主の宣教の委託に最後まで

忠実であろうと致しました。ウェスレー自身は次のように述べています。

「私は若い頃から一貫して英国国教会のメンバーであり、その教職である。今後も、私の魂が体を離れるときが来るまで、この教会から離れる意図も計画もない。しかし、もし私がここに留まることで、神が私に要求しておられることを実行できないような状況にあったとすれば、私は即座にここから離れることは、私に課せられた正しい必須の義務となろう。・・・」(「分派について」)

この判断に立つて、ウェスレーの場合は最後まで国教会から離れませんでした。彼の死後数年を経ずしてメソジストの群が国教会を離れたことはご承知のとおりであります。矛盾を抱えた団体を束ねて、ウェスレーだから離脱しないで済んだのだと後生の多くの教会史家は見ているでしょう。

問題は、私たちの群のことです。ホ群が初めの愛から離れず、ホーリネス信仰にしっかりと立っているか否かが常に問われるわけです。中田重治もウェスレーの信仰を異教の地である日本に植え付けるべく闘ったのでありますが、彼は「ホーリネス教会が将来なくなることを私は恐れない。むしろ、名前だけで内実のないホーリネス教会となることを恐れる」という意味のことを言っておりますが、私たちの肝に銘じるべき言葉であります。

そういうわけで、はたして皆様のご期待に添うようなご用ができるかどうかがこの者にとって大きな課題であります。皆様のお祈りを切にお願いする次第であります。

# 教派の流れ (10)

## 聖泉キリスト教会連合

日本聖泉キリスト教会連合〔\*略して聖泉連合〕は、日本全国で8教会からなる小さな群れです。東海地域には、静岡県周智郡に森聖泉キリスト教会（太田邦恵牧師）、愛知県豊明市に中京聖泉キリスト教会（牧師・筆者）の2教会があります。

教会名のあたりに教団名をつける（聖泉・中京教会のように）のではなく、教会名のなかに教団名が取り込まれているというところが、名前の特徴と言えるでしょうか？ キリスト教年鑑では「メソジスト系独立教派」として分類されています。

1969年8月に、イムマヌエル綜合伝道団から、信仰の実践上相容れなくなり袂を分かった教会および教職者によって設立され、今年で37年目になります。

第一世代の牧師たちはすべて前の教団の神学校で訓練を受け、その教団で何年かの牧会経験をもつ者たちです。現在は、聖泉連合となってから牧師になった、筆者のような第二世代が多くなりました。

信仰面では、かたく聖書信仰に立つこととアルミニアン・ウェスレアンの神学的立場

を受け継ぐことを標榜しています。その中で、きよめの信仰を、地域教会において主に誠実な信徒として“教会に仕える”という実践面に力点を置く傾向があります。

聖泉としての特徴は、教理的な部分よりもむしろ教団の運営の仕方に現われているように思います。

地域教会はそれぞれ単独で宗教法人格を持ち、その教会の牧師や信徒の賜物、培われてきた伝統、置かれた地域性などによって独自の特徴を全面に打ち出した教会形成をしています。讃美歌を用いる静かな教会から、ワーシップ&プレイズを歌うにぎやかな教会まで、実にさまざまです。

各個教会のそのような独自性や主体性を認め合いつつ、〈連合体〉というゆるやかなつながりをもって、互いに協力していこうとしています。

ですから一面、宣教師を海外に送り出すとか、開拓教会を生み出していくといった群れが一体となって力を発揮していくような面では弱いところもあります。

そうした群れの強みや弱みを心得ながらこの時代にあってきよめの信仰の実践のあり方を求めつつ、連合体としての協力を進めているのが聖泉連合です。

[記・秋山直光]

## 東海聖化交友会 2005年度決算報告

【収入の部】			【支出の部】		
科目	金額	備考	科目	金額	備考
会費	114,000	32教会38口	講師謝礼	173,300	謝礼,交通費,おみやげ,接待
東海聖会献金	220,971	6月席上献金	通訳者謝礼	20,000	
聖化大会献金	119,586	10月席上献金	奉仕者謝礼	10,000	証し人2名
一般献金	80,000	7件	JHA分坦献金	81,000	会費1/3・集会献金・一般献金
雑収入	6,000	録音テープ代金等	講師渡航費分担	61,800	
利子	16		クリスチャン新聞 広	22,000	聖化交友会協賛広告
			JHA全国協議会	20,000	
			会場費	40,000	
			会議費	24,619	
			広報費	60,080	
			事務通信費	15,745	
			テープ	27,160	
小計	540,573		小計	555,704	
前年度繰越	371,374		次年度繰越	356,243	
合計	911,947		合計	911,947	

# Books

今回は、きよめの良書を2冊紹介いたします。この2冊は、2002年12月と2004年6月にそれぞれ発行されました。著者のシーモンズ先生は、インドの技術宣教師であった父親を持ち、宣教師の子どもとして育ちました。やがてユナイテッド・メソジストの宣教師として、南インドで12年間奉仕をされました。帰国後22年間 教会での奉仕をされ、その後アズベリー・セオロジカル・セミナリーの教授として牧会学を教えられました。1991年に引退され、その後も良い働きを継続しておられます。

(インマヌエル岐阜教会 内山繁実)

デイビッド・A・シーモンズ著 河村従彦訳

「恵みを知らないクリスチャン ー行いの罫からの脱却ー」

「子供服を着たクリスチャン ー幼児性からの脱却ー」

☆「恵みを知らないクリスチャン」のテーマは、間違った完全主義です。特に「恵み」と「恵みでないもの」の角度から、なぜ律法主義や形式主義になりやすいのか、頑張ってしまうクリスチャンになるのかが記されています。《良いクリスチャンになろうと努力している。いつも罪責感がある。自分は価値がない。自分で自分を赦せない。頑張るほど落ち込む。実は神様に怒りを持っている。聖書を読むともっと要求されそうで怖い》などと思う原因や、その中からの解決を下さる主の恵みを知ることが出来ます。条件付ではない主の恵みです。

☆「子供服を着たクリスチャン」のテーマは、自分の中にある幼児性です。毎日の生活の中に、足を引っ張る幼児性が出てくるとき、きよめが分からなくなって自分を裁いたり、人につまずいたりすることがあります。みことばと多くの例を用いながら、幼児性を脱ぎ捨てることについて詳しく記されています。自分自身を見つめるのに助けとなる本です。

心の奥深くに光が当てられる本ですので、少し読んで批判したり、反対になんでも鵜呑みにするのではなく、心を開いて主と語り合いつつ、恵みを体験しながら読むことが大切です。



## 「東方教会から学ぶ」

COG春日井栄光キリスト教会 関 昌宏

東西教会の分離は1054年のことで東方教会はバルカンからロシアへと拡がっていきました。日本では函館や東京神田の聖堂が知られている他はあまり馴染みがありません。しかしながら近年私たち「きよめ派」の源流であるJ.Wesleyが東方教会からも多くの影響を受けていることが明らかになってきました。たとえば救いに関して、神の先行的な恩寵に対して人間が応答する時になされると私たちは理解しています。こうした神の業への人の参与という考え方は東方教会に特徴的なものです。次にWesleyといえは聖化の教理とその実践が強調されています。私たちにとって聞き慣れたこの教えも、信仰義認を中心とするプロテスタント神学において位置づけることは容易なことではありません。従来この点をプロテスタントとカトリックの統合として理解しようとしてきましたが、むしろ東方教会の中心的な教えである「神化＝人間性の根こそぎの変革」からの影響が大きいのではないのでしょうか。私たち「きよめ派」の信仰理解に東方教会の影響が見られるわけですが、今日の教会を取り巻く諸問題、たとえば合理主義や知性偏重の是正、霊肉を二元論的に捉えてしまいやすいという問題、個人主義の克服（救いと教会の関係）、行き過ぎた西洋偏重主義の克服といった点に関しても東方教会の教えと実践から多くのヒントがあると考えています。（注：THA総会の「学びのとき」に発表されたものを要約していただきました）